

S.R.ランガナタン

『余暇のための教育 (Education for Leisure)』に見られる教育の概念とインド的人間形成思想について

吉植 庄栄 (東北大学附属図書館)

1. はじめに¹

『教育思想』第42号の拙稿²にて、S.R.ランガナタン³ (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) の著作“New Education and School Libraries” (筆者訳: 『新教育と学校図書館』、以下『新教育』) を手掛かりに、学校図書館とランガナタンの教育観について検討した。当稿では、児童・生徒・学生の人間形成の分析と、その人間形成の場所となる学校図書館についての考察を深めた。本稿では、学校卒業後の人間形成に関するランガナタンの思想を考察する。今回はランガナタンの著作の中でも成人教育 (Adult Education) について論じられる“Education for Leisure” (筆者訳: 『余暇のための教育』) を紹介して考察する。『新教育』と同じく、本書は国内に訳本はなく先行研究も無い。本書を紹介しつつ従来、図書館学者として見られていたランガナタンの教育的な業績へさらに光を当てたい。また、本書および『新教育』等、ランガナタンの著作にはインド的な人間形成思想が背景にあると考えられる記述が多く、これまでもインド的な人間形成観を数回にわたり取り上げた。本稿でも同じく、本書におけるインドの神話やヒンドゥー教思想家の影響を考慮しつつ、インド的な人間形成観の特質をさらに列挙し、現代的意義を考察する。

¹ 本稿は、平成26年9月6日に開催された第47回東北教育哲学教育史学会における発表「S.R.ランガナタン『余暇のための教育 (Education for Leisure)』に見られる教育の概念とインド的人間形成思想について」を土台にして論文化したものである。

² 拙著「S.R.ランガナタン“New Education and School Library”に見られる教育の概念と学校図書館観」『教育思想』42号, 2015, pp.19-48.

³ S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972)

インド・マドラス州 (現タミルナドゥ州) 出身の数学者・図書館学者である。1931年に『図書館学の五法則 (The Five Laws of Library Science)』を発表した。そのほか、分類法でも独自の『コロソ分類法 (Colon Classification)』を考案した。インド図書館運動の父と呼ばれるのみならず、その業績は世界的に有名である。

2. S.R.ランガナタン『余暇のための教育 (Education for Leisure)』について

2.1. ランガナタンの諸著作の中での位置づけ

ランガナタンの多くの著作の中でも『余暇のための教育 (“Education for Leisure”)』は教育に関するものとして位置づけられる。関連する著作には次のものがある。

総論：『図書館学の五法則⁴』 (“The Five Laws of Library Science”, 2nd. ed. 1951.)

教育関連：『新教育と学校図書館』 (“New Education and School Library”, 2nd. ed. 1961.)

インドの神々に対する言及：『レファレンスサービス』 (“Reference Service”, 2nd. ed. 1961.)

2.2. 『余暇のための教育 (Education for Leisure)』について

本書の初版は1945年に刊行され、改版が第2版1949年、第3版1954年⁵、第4版1961年と続いている。本稿は最後の版であり、日本国内の大学図書館で複数の所蔵が確認され、頒布範囲が広いと考えられる1961年の第4版に基づく。

本書の記述の大部分は1945年マドラス政府から刊行され、すぐに絶版になった“Handbook of Reference”が起源であり、本書の由来紹介でもこのハンドブックを初版としている。その後、再刊の要望に答えて第2版と第3版がインド成人教育協会 (Indian Adult Education Association) から刊行され、第4版はAsia Publishing Houseから刊行された。

内容はランガナタンが、1944年9月にマドラス女性防空団 (Women's Air Raid Precaution Corps of Madras) で講義した内容が元になっている。この講義は、成人教育という社会事業 (Social Service) に従事する女性達 (ソーシャルワーカー: Social Worker) が、聴講したものである。女性たちに話をすることのためか、インドの女神を例えにする等、女性を意識する言及も含

⁴ 第一法則：Books are for use (本は利用するためのものである。)

第二法則：Every reader his [or her] book (いずれの人にもすべて、その人の本を。)

第三法則：Every book its reader (いずれの本にもすべて、その読者を。)

第四法則：Save the time of the reader (読者の時間を節約せよ。)

第五法則：Library is a growing organism (図書館は成長する有機体である。)

⁵ 本書には各版の刊行年は明記されていないものの、OCLCによるWorldCatで刊年の情報を確認することができる。<https://www.worldcat.org/>, (参照：2014-08-31)。

まれる。講義録ということもあり、多少説教的・煽動的な調子である。また、時折、聴講生との問答のやり取りも記載されており、生き生きとした本文となっている。

2.3. 『余暇のための教育 (Education for Leisure)』の内容について

本書の概要は次の通りである⁶。

【内容】 Part A 序文

Part B 社会事業 (Social Service)

Part C 余暇 (Leisure)

Part D 教育 (Education)

Part E 成人教育 (Adult Education)

Part F 図書

Part G 識字 (Literacy)

Part H カリキュラム

Part J 方法

Part K 講座例

Part L セミナーの技術

Part M 実際の例 (ソビエト連邦の事例)

Part N 政府の役割

Part P 結語

Part Q 参考文献

2.3.1. Part A 序文

最初に当書の由来と改版の経緯が示される (2.2.で既述)。続いて当書で扱う問題を概説する。ランガナタンによると、独立したインドの民主主義を支えるため、それを担う大衆の知的レベルを引き上げることが必要である。そのため、成人教育に力を入れねばならないとする。成人教育は、余暇に図書を読む事での自学自習が基本スタイルであるとも指摘する。これをふまえ本書は、「余暇」、「図書」、その「図書」を蓄える「図書館」、「成人教育の方法論」を焦点として扱うと述べる。

⁶ なお Part I と Part O が存在しない。推測であるが、改版の際に削除した章であると考えられる。今回は他の版の目次情報を入手できなかった (国内の図書館には別の版の所蔵情報が無い。) ので、今後確認したいと考える。

2.3.2. Part B 社会事業

このパートでは、成人教育事業の土台である社会事業について、その定義づけを目指している。ランガナタンは次の点を検討せねばならないとする。

- ・社会事業とは何か。
- ・社会事業における教育の位置づけ。
- ・教育や余暇における図書の位置づけ。
- ・成人に対して、図書による余暇の自己教育をいかに応援するか。

また慈善事業（charity）と社会事業との違いを検討している。慈善事業は確かに社会事業と似ているが、個人が利益を得るためや、宗教上の功德を得るためのもので、この両者は異なるものとしている。それらをふまえ、辞書等にあるこれまでの社会事業の定義を列挙し、それを検討する。そして最終的には社会事業を次の様に定義する。

社会事業とは、一般に認められた基準以下の生活をしている社会層を引き上げる、組織だった取り組みのことである。個人を支援することにより行われるが、主目的は社会集団を引き上げるためである。加えて一人一人に安心を直接与える活動であるが、主目的は社会集団を持続させ、持ちこたえさせるために行う活動なのである⁷。

2.3.3. Part C 余暇

この図書のタイトル『余暇のための教育』にある「余暇」についてである。ここでは「余暇」の定義を通して、余暇の本質を議論する。例えば時間的な「余暇」であるが、日々の余暇、月々の余暇、年ごとの余暇の3つを列挙するほか、大人の生活の主問題である生計を得る仕事との関連を議論する。また「何もしない時間」と「自らの創造性を発揮する時間」の区別や、人生における「余暇」の位置づけにも言及する。

2.3.4. Part D 教育

ランガナタンの「教育」観が示されるパートである。成長の過程や個性、生まれながらの学習欲求、教育における力や先天的に負うもの（Vasansa 業的なものを含める）、といったものについて説明がある。

⁷ S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, 4th ed. (Ranganathan series in library science, 8). Asia Publishing House, 1961. 179 p., p.19.

2.3.5. Part E 成人教育

教育の検証をふまえてこの作品の主題である「成人教育」論を展開するパートである。成人の教育可能性や学ぶ意欲、興味を持つ対象、学ぶための施設、科目などが論じられる。そしてこの成人教育では、興味関心の深化・細分化と学習時間が余暇に限定されるという時間的問題のため、図書を使った独学が基本になることも説明される。

2.3.6. Part F 図書

成人教育の重要な道具となる「図書」論が展開される。最初に、成人教育で使用される図書は独特であることが説明される。成人の興味対象は、学校教育で扱うものよりも専門的で且つレベルが高く、専用の「図書」の準備が重要であるとする。成人教育では適切な本との出会いを保障することが成否にかかっている。そのために自治体や国家規模の図書館ネットワークが構築されねばならない、とする。また「図書」自体の生産と供給を論じ、不足しがちであるインドの問題にも触れる。

2.3.7. Part G 識字

識字者・非識字者についてのパートである。成人教育の対象であるものの当時のインドには非常に多かった非識字者を取り上げることで「リテラシー」について詳細に論じる。非識字者の割合が当時90%であったインドにおいて、図書による成人教育の実現には大きな困難があった。ランガナタンが提案するのは、音声資料や画・写真集・絵本等映像的な資料の導入である。また義務教育後、教えた内容が失われないようにするため図書館による継続教育の重要性も説いている。

2.3.8. Part H カリキュラム

続いて成人教育のカリキュラム論である。前提としてカリキュラムは、地域の問題、学ぶ成人の知的レベル、彼らの職業や知的関心、教える人、本や使える施設など、の諸要素に基づいて決めねばならないとする。

また最初は個人の仕事など身近に関心を持つ内容から学び始める。この内容は興味を持たれがちな物質的レベルのものや、基礎科学についてである。次に一人で生きている状態から他者と組織を作り活動する、という気持ちを満たすため、歴史的な事例と現代の情報を教える。これにより人生が豊かになる。第三のレベルは、哲学や心理学、政治理論、経済理論、社会理論などの社会科学を学び、抽象的なことを知力で理解できるようにする。人の関心

は一つが満たされると次の関心に行き、レベルが上がっていく。また芸術や宗教は、人々を知的レベルから霊的レベルに引き上げていく。

続いて取り上げるべき代表的な図書をカテゴリー別に列挙するほか、特別なカリキュラムの紹介、例として講演会などを挙げている。

2.3.9. Part J 方法

成人教育の現場で取られる手法について「徒弟型」「研究室型」「工作室型」「講義型」「ディスカッション型」「フォーラム型」「図書館活用型」「プロジェクト型」の8つの手段が紹介される。

2.3.10. Part K 講座例

成人教育の講座例として「陶芸職人のコース」「船員のコース」の2つが示される。どちらのコースも職業と類縁した内容を教える内容となっている。

2.3.11. Part L セミナー式

そして成人教育の中でも「セミナー式 (Seminar Method)」についてさらに詳しい説明がなされる。まずセミナー式をグループ学習法が進化したものとし、全参加者の動的参加を促す手法だと解説する。そしてこのセミナー式は民主主義の産物であり、教室や会議で陥りやすい失敗（特に聞いていない生徒・参加者の発生）を避けることができると紹介している。

引き続き、セミナーの6つの段階が示される。その解説として、セミナーの主査 (Leader-in-Chief) を決める事、セミナーの事前準備、班で作成する調書 (Working Paper)、全体会や班別活動 (Group-Meeting)、運営する職員、セミナーの会場、扱うテーマは、総合的な問題を扱うべきである件、について触れられる。

2.3.12. Part M 実際の例

非識字者問題を急激に解消させたソビエト連邦の事例が、成人教育の取り組みの先進事例として紹介される。ソビエト連邦では、ロシア革命以前の1897年には識字者が男 33.7%、女 11.7%であったのに対し、1926年には男 58.2%、女 34.6%までに増加した。1928年から始まり、1930年代に続く第1次、第2次五か年計画の間も増加は続き、非識字者数を劇的に減らすことに成功した。それに伴い新聞、雑誌、図書といった印刷物の件数も爆発的に増え、それを人々に供給する図書館の整備も進んだ。その他の文化施設・組織として、美術館、文化サークル (Cultural Clubs)、文化公園 (Park of Culture and

Rest)、劇場、映画館、ボランティア団体、教員研修所、研究機関の伸展が紹介される。

2.3.13. Part N 政府の役割

成人教育における国家の役割を論じる。様々な関心を持つ成人の教育には、高度なスキルを持つ人材が必要であり、費用もかかる。政府側にも成人教育を導く人材を得なければならない。国が統一的にその人材育成を担わねばならないとする。

2.3.14. Part P 結語

最後に成人教育について、インドの歴史的な文化に触れつつ結語を述べて終わる。

2.3.15. Part Q 参考文献

参考文献集のパートなので、割愛する。

以降、本書に書かれている内容に基づき「教育の目的」「成人教育を行うために」「成人教育の教育内容と手法」「インドの人間形成思想」に分けてランガタンの教育思想にアプローチする。

3. 教育の目的

3.1. 教育の目的

本書においてランガタンは教育を次のように定義している。

教育はその人らしさを発揮させるよう、一生涯ずっと続くものである⁸。

教育とはその人自身になる過程である。その人の個性を十全な発揮へ向かって成長させる過程を指す⁹。

教育とは各々の個性を発揮させるよう、その人の最高状態まで助け導くものである¹⁰。

これらの言葉にあるように、人はそれぞれ異なるものであるので、教育と

⁸ Ibid. p.12.

⁹ Ibid. p.30.

¹⁰ Ibid. p.171.

はその人その人の潜在的な力を援助して引き出すものであるとしている。一人ひとりが異なる様に、興味関心や特性、潜在的に持っている創造性も異なるためである。そして教育は、一生継続くものであることも指摘している。

3.2. 教育の原理

また教育の原理を次の様に分析している。

人間は、「心因性の力 (Vasana, Prarabdha)」「生物学的な力 (Sarira-Parampara)」「環境的な力 (Vatavarana)」の三要素の支配下に置かれているとする。個性は、「身体」「魂」「精神」から成る。とくに精神は次の5要素から成り、そして教育とはこの5要素を次のように育成するものであるとする。

- (1) 原初的な感覚→ (教育で) 感覚を鋭くする。
- (2) 記憶→ (教育で) 豊かにする。
- (3) 知力→ (教育で) 育てる。
- (4) 一時的な感情→ (教育で) 純化する。
- (5) 直観 (直感) → (教育で) 解放し発揮する。

これらは周囲の模倣と反模倣の繰り返しで、成長するものであるとしている¹¹。

その例としてインドの偉人である、C.V.ラマン¹²、S.ラマヌジャン¹³等を挙げて、具体的な内容を述べている。

3.3. 成人教育の目的

成人教育の目的としては次を挙げている。

- (1) 義務教育の成果を無駄にしないため¹⁴。
- (2) 社会事業の側面から、下層にある人々を教育によって上層に引き上

¹¹ Ibid. pp.32-35.

¹² C.V.ラマン (Chandrasekhara Venkata Raman, 1888-1970)

インドの物理学者。光のラマン効果を発見した。1930年にアジアで最初のノーベル物理学賞を受賞した。

¹³ S.ラマヌジャン (Srinivasa Ramanujan, 1887-1920)

インドの数学者。鬼才としてケンブリッジ大学に招かれるが、夭逝した。

¹⁴ S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, pp.92-93.

げるため¹⁵。

民主主義の運営のため¹⁶、共同体の平均以下の人々の質を上げるという役割がある。

- (3) 引き上げた結果、社会が改良されるという意義。

質の向上を果たした成人が飢餓や社会不安、後進性等の克服を進める。このことで社会は改良される¹⁷。またこのことにより個々人の人生の質が向上する、としている¹⁸。

- (4) 成人の仕事の質を上げるため。

これは学ぶことで仕事の理解が深まり、その結果、仕事の質が高まり、高い成果が産みだされるからである¹⁹。

4. 成人教育を行うために

4.1. 成人教育の特性

最初にランガナタンは成人の教育可能性について検討している。成人の「学習能力」は子どもに比較して直感と感情を除き、様々な学習能力が衰えている、というのが一般的な考え方である。具体的には成人は子どもと比べて感覚はにぶり、記憶力と知力は低下し、好奇心の幅は狭まっている、というものである。

しかしある年齢から老化による衰えが発生するというのはまやかashiで、直感力は人それぞれであると主張する。ランガナタンは、アメリカの心理学者にして教育学者の E.L.ソーンダイク²⁰の研究成果を取り上げ、学ぶことは年齢を重ねても可能であるとする。

次に成人の「学習欲求」である。ランガナタンの主張によると、子どもの頃は好奇心旺盛であることに対して、大人からの抑圧により、成人になる過程でほぼ全ての興味関心を失ってしまうとする。いわば子ども時代は、「抑圧

¹⁵ Ibid. p.19.

¹⁶ Ibid. p.14.

¹⁷ Ibid. pp.14-15.

¹⁸ Ibid. pp.82-83.

¹⁹ Ibid. pp.54-57.

²⁰ E.L.ソーンダイク (Edward Lee Thorndike, 1874-1949)

米国の心理学者。動物の学習実験により効果の法則、練習の法則などを主張。のち、教育測定、語彙（ごい）研究などに業績を残した。著「教育心理学」など。

参照『デジタル大辞泉』（JapanKnowledge Lib 所収）

<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001010856300>, (参照:2015-11-18) .

の時代である」とまで述べている。子ども時代の抑圧とは、例えば大人は子どもの質問に対して、問に対する答えよりも「黙れ！」と命じることが多い、といったことが一例である。まさに学校教育こそは子どもの最大抑圧機関だとも述べている。

成人教育に携わる者は、この抑圧された中でもかろうじて生き残っている興味関心を生き返らせるよう応援をする。知的レベルが高い者はこれを自分で復活させることができるが、平均以下の者はその力がないので、成人教育に従事する者は、苦しい道ではあるが、心理学の成果を頼りに地道な努力を続けるべきであるとする。

成人教育の背景には経済的要因もある。富の有無によって学習や研究に必要なものの差、ここでは図書などのメディアの多寡の差が成人間に生まれてしまう。これに対して社会事業による成人学校（Adult School）の設立や図書館システムの整備が必要だとしている。そして成人の興味関心の幅は、近代科学の細分化の傾向もあって狭くなりがちであるから、携わる者は広げる努力をせねばならない、と述べる。

4.2. 余暇

本書の主題である成人教育は、余暇に行う事が原則である。

成人に対する教育は終日行うことができないものであり、余暇にのみ行うことができる。そのため学校教育の様に長時間拘束して講義を聞かせるといった通常の教授方法は手段として取れない。その結果、図書による自学自習が基本となる²¹。

それでは「余暇」とは何なのであろうか。ランガナタンは次の様に述べている²²。

辞書には「余暇とは自由時間或いは何もしない時間や期間である。」とある。しかしランガナタンは「何にもしない時間」は存在せず、必ず何かに占められていると反論する。そして「余暇」の間も何かに従事せねばならないとし、どうせ何かに占められるのであれば、せめて効果的に使うべきだと主張する。「何にもしない」「余暇」というものは無駄に使われがちで、危険なものであるからである。それゆえ、「余暇」を使う技術というものが重要だとしている。そこから、『余暇のための教育』には二つの意味があり、「(1) 余暇の間の教

²¹ S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, p.11.

²² *Ibid.* pp.21-29.

育」と「(2) 余暇をどう使うかの教育」があるとしている。

また成人の時間は「生計を立てるための仕事の時間」「余暇」「自らの創造性を発揮する時間」の三つに分けられるとする。大多数の不幸な成人は、この三つが全て分裂しており、幸福な人ほどこの分裂をまとめあげ、やるべきことを二つ、あるいは一つにまとめあげているとする。「趣味」は「生計を立てるための仕事の時間」とは別の時間に取り組むものであるが、内容も別なことに取り組むことで分裂を促すこともある。それゆえ「本業以外の趣味を持って！」と人に勧める事は、分裂を促すことになり、間違っているとも述べている。

余暇とは人生の余白のようなもので、特に装飾された図書を例に考えると本文が「生計を得る仕事」で余白が「余暇」である。余白を美しいものにすればするほど、本文はより美しく良い物になるとしている。

理想的な余暇の使い方とは、機械印刷時代以前の装飾された中世の図書をイメージすると解るであろう。美しく繊細な絵や装飾によって小さなテキスト部分の大きな文字群を囲んでいる。明るい色の唐草模様や葉、花、或いは景色や肖像画が本文に挿入され明るくなっている。そして我々がラーマ・ラジュヤ (Rama Rajya) と呼ぶ理想郷では、本文と余白が区別しやすい状態にあり、余暇の余白は広くそして美しさに溢れている。そして余暇は仕事を明るく照らし、生き生きと描き出す。働く事と遊ぶこと、産業と芸術、これらはいずれ一体となる。余暇は仕事生活を満たし、仕事は余暇生活を満たすであろう²³。

4.3. 成人教育の道具としての図書

2.3.1.において、成人教育では「図書」による自己学習が基本になることを触れた²⁴。この「図書」についてさらに次のように述べている。

図書は知や情報を蓄えたもので、持ち運び可能なものである。つまり「思考エネルギー」を載せた持ち運び可能な媒介物である。これは空間の移動も可能であるが、時空も超えることができる。何故なら数百年前にこの世から去った人の思考を言語の障害さえ乗り越えれば、その思考エネルギーを受け取ることができるからである²⁵。

さらに図書を手段とした成人教育について、子どもの教育と対比してその特質を次のように述べている。子どもの学習は、周囲を模倣したり反面教師としたりして育つ。これに対し成人の学習は、専門的になり深い内容になる

²³ Ibid. p.28.

²⁴ Ibid. p.11.

²⁵ Ibid. pp.50-51.

ため、興味関心が同じにして、いわば先達にあたるような人が身近に居る可能性はかなり低い。そのため周囲の人間を模倣するという子ども型の学びができない。その代案が時間と空間を超える「図書」というメディアを活用することである。これにより成人の専門的な興味関心に応えることができるとする。

4.4. 成人教育における図書館

成人教育の場所、つまり「学習施設」であるが、前節で述べたように「図書」を活用した教育という形になるため、図書館で行うべきである、としている。図書館とは、様々な「思考エネルギー」を蓄えた「図書」を蓄え、人々に絶え間ない自己教育を促すものである。図書館はその人の欲する適切な図書を供給し、またその図書に適切な読者を誘導する。

成人教育は、この図書館という施設を使いこなすことが必須である。そのため成人教育の担い手は、図書館と一致協力して、成人教育を運営せねばならないとしている²⁶。その理由は、適切な図書との継続的な出会いが成人教育の成否を担っているからである。そして、これを支えるものとして公共図書館システム（図書館の協力体制²⁷）の援助が欠かせないとしている²⁸。つまり成人教育用の図書（専門書では難しいので、わかり易い内容の図書を潤沢に出版流通させること。）を豊富に備えたいわば、図書の城塞とも言うもの、そして一国の国立中央図書館を中心とする、国の隅々まで広がった体系的な図書館の組織体系を準備せねばならないとしている²⁹。

²⁶ Ibid. p.52.

²⁷ 現代の日本で図書館システムと言えば、電算機上の図書館業務システムを指す。しかし、英語の Library System は、次のような意味であると説明されている。

「図書館システム (Library System)

統合管理される複数の図書館のグループ、例えば中央図書館と分館や附属館といった構成である。また、独立して管理している図書館ではあるのだが、共通の目的を達成するために公式か非公式の協定を結んでいる状態。協定の下、各館はお互いが支店ようになる。」

Joan M. Reitz, *Online Dictionary for Library and Information Science* [online]. http://www.abc-clio.com/ODLIS/odlis_L.aspx#librarysystem, (参照：2014-01-28)

²⁸ S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, p.11.

²⁹ Ibid. pp.62-68.

4.5. 義務教育の成果を無駄にしないための図書館

ランガナタンは図書館について、義務教育と自己教育という観点でも次のように述べている。

カンタベリの大主教が最近貴族院で「14 才までに学んだ全てのことを、その後続けて学びもせず、実践もしないと、20 才までにすっかり忘れてしまう、というのは確立した理論である。」と言った。(中略) このことは何を示しているのであろうか。(公教育で) リテラシー能力を形成するために国費を投じていることがすっかり無駄になっていることである。公共図書館の利用を通して学校教育で習ったことの実践をする、という場所と機会を供給することが、この無駄を解消する唯一の手段である。それゆえ国内に広がった公共図書館システムには目標が二つある。一つは、これまでに考案された機関で最も力を持つ、絶え間ない自己教育の遂行機関としての目標であり、二つ目は公教育を受けた人々が、非識字者やリテラシー能力が無い状態に戻らないようするための機関、すなわち公教育に費やした国費を無駄にさせないという目標である³⁰。

つまり義務教育の成果を人々に維持することが図書館整備の大きな意義であるとしている。

この考えはランガナタンに先駆けて「インド図書館運動の父」と呼ばれる、バローダ藩王国の藩王サヤジラオ 3 世 (Maharaja Sayajirao Gaekwad, 1875-1939) の考えからも見て取れる。サヤジラオ 3 世は、一生涯にわたって学ぶ手段 (図書館のこと) を備えない教育は、屋根の無い家を建てるようなものだ、と確信していたという³¹。

彼はこの信念に基づき、領内に初等義務教育を実施するのと並行して、米国の図書館ネットワーク・システムを導入し、義務教育で教えた内容を、領民一人ひとりが補完し維持し発展できるよう制度整備を行った。ランガナタンが図書館人として活躍したのは 1924 年からであるが、サヤジラオ 3 世は、1910 年代初頭にはすでに取り組みを開始している。そのためランガナタンに影響を与えたと考える³²。

義務教育後の教育を成人教育とすれば、成人教育は義務教育で受けたものを図書館の活用で、維持し発展するものと位置づけられる。それゆえ図書館は公教育の成果を維持するという点で重要な役割を果たす機関であると言え

³⁰ Ibid. pp.92-93.

³¹ Murari Lal Nagar, *Maharaja of Baroda : the prime promoter of public libraries*, International Library Center Columbia, 1992, 77 leaves, [11 p.].

³² 拙稿「インドの図書館運動史：二人の父-サヤジラオ 3 世と S.R.ランガナタン-」『図書館文化史研究』2014, 31 号, pp.49-85.

よう。

5. 成人教育の教育内容とその手法

5.1. 成人教育の教育内容

成人教育の教育内容は、趣味や余暇の過ごし方、生活に役立つ知識（園芸や裁縫など）そのほか、日々の仕事の背景にある基礎科学が挙げられている。特にこの仕事の背景にある基礎科学は、先述したように仕事の質を向上しミス減らす役割があるので強調されている。この基礎科学を教える事例については、成人教育の創始者の一人である G.パークベック³³を取り上げている。その中では既知である現実の仕事の知識と、これまで知らなかった仕事に関連した基礎科学を交互に習い、被教育者側が学習意欲を失わないようにする工夫が述べられる。これについては、知っているものから知らないものの教授を連続して続けることにより興味関心を持続させ、そしてさらに興味の幅を広げる効果があるとされている。

5.2. 成人教育の手法

成人教育の手法として、ランガナタンは以下の 8 つを紹介し、比較検討をしている³⁴。

- (1) 徒弟型
- (2) 研究室 (Laboratory) 型
- (3) 工作室 (Workshop) 型
- (4) 講義型
- (5) ディスカッション型
- (6) フォーラム型
- (7) 図書館活用型
- (8) プロジェクト型

ランガナタンは、主体的に学ぶこと、グループで学ぶことを高く評価するため、特に「(2) 研究室型」「(8) プロジェクト型」を重視し、終始受け身で苦痛を強いられる「(4) 講義型」については変えたほうが良いとしている。

³³ G.パークベック (Georg Birkbeck, 1776-1841)

イギリスの教育家。職人の仕事の質が低く、ミスも多発することから、職人のための学校を 1800 年に設立し、機械工講習所運動 (mechanic's institute movement) に尽力した。S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, pp.54-55.

³⁴ Ibid. pp.117-131.

特に「(8) プロジェクト型」は「(8 つの) 全ての方法を統合するものであり、教育を創造的に、幅広い経験を下地とするものにする³⁵。」としている。さらにランガナタンは「(8) プロジェクト式」に準ずる「セミナー式 (Seminar Method)」について、別に 1 章を割き詳述することで推している³⁶。

また「(7) 図書館活用型」では、「図書館は成人教育の拠点であり、これら全ての教育方法の背後に存在する³⁷。」と述べている。

5.3. 成人教育の実際：セミナー式

実際の成人教育を具体的にどのように行うかについて、ランガナタンはセミナー式の詳細を次の様に説明している。

5.3.1. セミナー式の概要

セミナー式の利点は、全ての参加者が動的に課題に取り組むことができ、教室式や会議式で起こりがちな、後方に座っていて関与しない受講生の存在を解消することができるとしている。本来教育は双方向にディスカッションを交えて行うのが理想である。しかし、人口の増加により成人教育をすべき成人が増え、受講生もそれにつれて増えるという結果になると、大人数を教える必要に迫られ、教師からの一方向の講義の傾向が強まる。

その解消として、ランガナタンはセミナー式を使ったフォローアップを推奨する。またイギリス議会が、多い議員を分科会に分け、その審議を本会議で活かすようにすることを真似て、成人の学習の場にもこのセミナー式を導入し、全員参加型の学びを実現すべきであるとする。このように多くの受講者の精神を引き出し、学びを促進させるセミナー式は、非常に教育上有益であるのだが、一方、繊細にして長時間の準備が必要であるとする。

5.3.2. セミナーの 6 手順

続いて準備を含めた 6 段階の手順が紹介される。

- (1) 事前調書の中で課題を提示する。
- (2) 参加予定者の中で有望な者に、事前調書を着手してもらう。
- (3) 事前調書に詳しい説明と魅力的な文言を加える。

³⁵ Ibid. p.130.

³⁶ Ibid. pp.135-150.

³⁷ Ibid. p.126.

- (4) 第1回全体会：課題を、根本的な諸要素に分ける。
- (5) 班別活動：分けた課題を小グループで取り組む。
- (6) 第2回全体会：小グループが発見したものを調和させつつまとめ、結論とする。

5.3.3. セミナーの事前準備

この6手順の前に必要なこととして、主査を決め、少なくとも半年前から準備を進める必要があること、それから有望な参加予定者には事前から参画してもらおうこと、を挙げている。班は10以上にならないようにし、1つの班は3人を下らないように編成するべきとする。班の中の能力ある人に班長（Group-Leader）を勤めさせ、主査と共にこのセミナーの運営委員会（Steering Committee）を構成する。課題の形式は、連続した問いの形式で作成する。これを班ごとに回答する。

5.3.4. 1回目全体会と班別活動

第1回全体会では運営委員会の一人一人が輪番で、設問に対する推測を披露する。しかし、ここでは自論や決断を述べるべきではない。仮に何かするにしても、可能性をほのめかすくらいにすべきである。次に班別活動では、理想を言えば全ての問題を全ての班が議論することができれば良い。各班では報告者を設ける。構成員が必ず一度は報告者を勤めるようにする。一生懸命に考える事を強いると息を詰まらせてしまうので、脱線は必要である。しかし討議の時間とは分けるべきである。

また問題は細かい課題に分割して解答を出すことが、どの学問でも有効である。これはイギリスがインドを植民地統治した時の手法「分割して統治せよ（Divide and Rule）」を真似たもので、問題を深く掘り下げれば掘り下げるほど、細かい単位で回答を得る事ができる、というものである。また解答を出すには順番があり、Aが解ければ次にBが解け、C、Dと続くものを逆のDから解かせないようにする、と述べている。次に班の報告を作成し、セミナーの全参加者に渡す。

5.3.5. 2回目全体会とまとめ

続いて第2回目の全体会では、の各班の発見を順番に並べ、他の班の知見を他のグループのメンバーが評価する。そして反対意見やほかの選択肢も併記するようにする。全体の結論を出すためには、各班報告の要約をせねばならないが、主査一人では無理であるので、班長と分担するようにする。そし

て2回目の全体会が始まる前にそれを受講者全員に配るようにして、学習を促す。

最終的には発見したことをまとめる。その際に全会一致を目指す必要はなく、議論が起きる箇所は訂正の提案を出すようにしてもらおう。多くの時間を無駄にすること、混乱することを避けるには、他の選択肢を訂正という形で提言することが良い。しばしば意見が対立する二人が議論を戦わせ、時間を無駄にしがちであるが、この解消も兼ねている。

5.3.6. セミナーの運営と会場など

またこのセミナーの運営事務を行うスタッフや会場にも言及している。このようなセミナーを運営するには能力があるスタッフを、お金をかけて確保せねばならないとしている。会場は郊外の静謐で宿泊ができる場所にすべきであり、そこで泊まりがけで寝食を共にするようなセミナーを行うべきである、と述べる。そのような環境であれば「人は通常の100倍の力を引き出す」ことができる、とも述べている。最後にセミナーで扱う課題は、総合的で受講者が共同で取り組むことができるものにすべきであるとしている。

6. インド的人間形成思想

以上、ランガナタンの成人教育思想を概観した。続けてこの成人教育及び教育思想の背後にあるインド的な人間形成思想を本書の記述から抽出する。

6.1. 知・教育＝女性・母なるもの

本書は女性に対して行った講義録という面もあり、知識・教育・成長と「女性」性に関する言及がある。

6.1.1. インドの伝統

ランガナタンによるとインドの伝統では、知識や教育、成長に関するものを「女性的なるもの」として捉える特徴があることを指摘している。

(前略) インドの伝統では、サラスヴァティやラクシュミのような女性神が学びや成長を象徴しているのである³⁸。

そしてここでは、マイトレイ (Maitreyi)、スレスワラー (Mrs Sureswara)、

³⁸ Ibid. p.168.

ラトゥナケティ・ディクシータ (Mrs Ratnaketi Diksita) といった智慧豊かであった古代インドの女性たちを例に挙げて、その文化を解説している³⁹。

6.1.2. オーロビンド・ゴーシュ『聖なる母 (The Mother)』⁴⁰

本作にはベンガル州出身の反英独立運動家、ヒンドゥー教的思想家であるオーロビンド・ゴーシュ⁴¹ (Sri Aurobindo Ghose, 1872-1950) 『聖なる母 (The Mother)』で示されている世界観に基づき、人間形成のプロセスを説明している箇所がある。

教育とはその人自身になる過程である。その人の個性を十全な發揮へ向かって成長させる過程を指す。これは人間存在の動的一面である。それは聖なる母の力(シャクティ: Shakti) が司る面である。この力は人を変え、活力を与え、その人の創造性を發揮させる。オーロビンド尊師は彼の作品『聖なる母』で、教育にとって一番力を持つ「聖なる母」は、インドの伝統的な神であるマハーサラスヴァティ (Mahasaraswati) の形をとって表れると言っている。このマハーサラスヴァティは、「聖なる母」の行動の力、完全性と秩序の精神を表している。マヘーシュワリ (Maheswari) は世界の原動力の大きな輪郭線の上に横たわって(筆者注: 智慧の神なので世界を区分けして秩序づける) 表れる。マハーカーリー (Mahakali) は世界のエネルギーと推進力として表れる。マハーラクシュミ (Mahalaksmi) は世界のリズムと規準を発見する。そして先述したマハーサラスヴァティは、この三神を絶妙に組み合わせ、完全な完成へ向けて細部を統括していくのである⁴²。

これらのインド諸神の説明は同時期にまとめられた『レファレンスサービス (Reference Service)』にも次のように述べられている。マヘーシュワリは智慧を表し、マハーカーリーは強さや情熱の強さを、マハーラクシュミは魅

³⁹ Ibid. pp.166-168.

⁴⁰ Sri Aurobindo Ghose, *The Mother*, 1928.

邦訳 [シュリーオーロビンド著] ; 金谷熊雄訳『聖なる母』オーロビンドソサイエティ, 1962.8.

⁴¹ オーロビンド・ゴーシュ (Sri Aurobindo Ghose, 1872-1950)

近代インドの宗教思想家。ケンブリッジ大学を卒業後、反英闘争を経て、ヒンドゥー教の指導者となり思索と教育に専念した。彼は、インド思想こそが世界を導き人類を救う思想であると力説し、また悟りによって得られる絶対者の力を身につけた超人の出現を待望する論を述べた。主著に『聖なる生活』(1949)がある。

参照『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(JapanKnowledge Lib 所収)

<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000042314>, (参照: 2015-11-17) .

⁴² S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, p.30.

力や調和を表す。そしてマハーサラスヴァティはシャクティの原動力であり、完全性の精神であり、他の3神を司る。そして（ここではレファレンス・ライブラリアンのことではあるが、）この4相の完成により、その人はシャクティの一部となり最高の存在から溢れ出たものとなる、としている⁴³。

6.2. 人と学びあう自己教育

ランガナタンは成人教育、或いは教育そのものがその人その人の個性に合わせた「自己教育」であるとする反面、グループによる学びを非常に重視している。自分が自分になるための教育とは、非常に個人的な自己研鑽によるものと考えてしまいがちであるが、逆に人が集まって共に学ぶ事を重視するとはどのような理由によるものであろうか。

6.2.1. 学ぶことと教えること

ウパニシャッド (Upanishad) によると、教育とは次の4階梯を登るものであると述べている⁴⁴。

- (1) 学ぶこと (Adhiti: learning)
- (2) 理解すること (Bodha: understanding)
- (3) 実践すること (Acharana: practice)
- (4) 教えること (Pracharana: teaching)

つまり学んで理解するには実践が伴い、そして人に教えることができはじめて真に理解したと言える、ということを示している。すなわち個人が一人で理解することには限界があり、実践や教える事を通して、完全な知識に近づくことができるという事を示唆している。

6.2.2. 『リグ・ヴェーダ』

古代インドの聖典、ヴェーダのうちの一つで、一番古い『サンヒター (本集)』に含まれる賛歌集である。サンスクリット語の古い形態であるヴェーダ語で表記される。

集まって、一緒に話して正しく理解しよう。
一緒に祈り、一緒に達成しよう、統一とお互いの理解を。
意思をまとめ、気持ちを調和させよう。

⁴³ S.R. Ranganathan, *Reference service*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1961, pp.182-184.

⁴⁴ S.R. Ranganathan. *Education for leisure*, p.170. (原典不明)

それぞれの考えを出して、協力しよう。皆の中に完全な調和が生まれるように⁴⁵。

ランガナタンはこの賛歌を「教育とは、グループで協働して学ぶことである。」ということの象徴とし、引用することで、プロジェクト式やセミナー式の教育を賞賛している。

6.2.3. 共に学ぶ・共に真理を生きる

本書のその他の箇所でも次のようなインド聖典の考えを引用している。

一緒に生活をしよう。一緒に食事をし、一緒に大胆に行動しよう。共に学ぶことで内なる力を引き起こそう。怠惰を憎み、一緒に甘えを排除しよう⁴⁶。

以上の様に集団で「共に学ぶ」ことが強調されている。まとめると、自己教育は個人的な一面があるがグループで学び、分からない所を教え合い、完全に向かうという構造が見える。そして完全とは、前節で指したような四女神、つまり智慧（マヘーシュワリ）、力（マハーカーリー）、調和（マハーラクシュミー）、これらを統括する力（マハーサラスヴァティ）、これらの四相を十全に発揮するようになることである。この完成形の境地をランガナタンはこのように語っている。

その人の生成（becoming）が最高に発揮される時、それは全ての生成と一緒にある時で、その時、彼は彼自身となり、真理を理解し、それと同一になるのである⁴⁷。

7. まとめ

以上ランガナタンの成人教育思想を『余暇のための教育（Education for Leisure）』から概観した。

まとめると教育の目的は、その人がその人の特性を十全に発揮することができるようになることである。成人教育の目的は、義務教育を無駄にしないために継続して教育を行い、得た知識を維持し発展させるためのものである。また一人一人の成人の資質向上を実現し、社会の下層の人々を上を引き上げ、

⁴⁵ Ibid. p.131. リグ・ヴェーダの典拠は、Rig Veda ; mandala 10 ; anuvaka12 ; sukta 191 Mantras 2-4 ; (astaka 1 ; varga 49 ; mantras 2-4). (=F Max Muller's ed 2 ; 1822 ; V4 ; 514-5). とある。

⁴⁶ Ibid. p.150. タイティリヤ・ウパニシャッド、2章1節からとある。

⁴⁷ Ibid. p.171.

社会改良を目指すためのものである。

成人が仕事をしている以上、成人教育は余暇に行われるものであり、図書による自学自習となる。図書を使うことが中心であるので、充実した図書館とそのネットワークがそれを支える。学ぶ内容としては、成人の性格上、専門的な内容になるものである。内容としては様々な内容があるが、特に成人が携わっている仕事の背景にある基礎科学等が望ましく、教育の方式としては、受動的ではなく能動的な学習方法にしてグループで学ぶ方式、例えばプロジェクト式などが良いとしている。

この背景にはリグ・ヴェーダの「共に学ぶ」の精神がある。そして「共に学ぶ」事を通し、習い、教え合う事を進め、各々の創造性を解放し、その人の個性を十全に発揮できるようにするものが教育であるとする。そしてオーロピンドの思想の中の、シャクティ(力)の表現体であるインドの四女神(智慧・力・調和・完全)という考えをモデルとして、人格の完成を目指すとしている。

8. 考察

8.1. 『新教育』との比較

ランガナタンが残した教育関係の業績は、2.1.で述べたように『新教育』とこの『余暇のための教育』の2冊が大きなものである。これらを比較する。

8.1.1. 相違点

まずは前者が図書館（とくに学校図書館）について大きくページを割いていることに対して、当書は、それほど大きくないことである。これはこの2冊の編集経緯の違いに起因するものではないか。前者は、大学で学校図書館の講義を持った際の講義ノートや経験を反映した図書であることに対し、本書は社会教育に携わる担当者に対するレクチャーを基に書いたものだからである。つまり図書館学的な内容を教える必要が比較的無いためであろう。前者は、職員の業務や施設、分類・目録、各業務に関することといった実務の詳細な解説が出ている一方、本書には成人教育における図書館の役割については言及されるが、特に業務的な話題は出てこない。

8.1.2. 共通点

両者で主張されるランガナタンの教育思想は、一貫している。これは前節でまとめたように、図書を介した自己教育こそが教育であり、これを自律的に動的に行うようにせねばならない、というものである。そして、グループ

活動でのディスカッションや、他者に教える事によって自らの知識を完成させる、ということに重点を置いている。加えて、図書館を場所とし、図書館の支援の下、それを行う事も一貫している。

以上を背景に考えると、児童・生徒・学生期についての教育思想を語っているのが前者であり、社会に出てから一生が終わるまでのそれを語っているのが後者である。この2冊を合わせると、一生涯を通した人間形成思想がまとめられている、と考えることができよう。

8.2. 現代的意義

拙稿⁴⁸で示したように、ランガナタンの主張は現在国策で進めている高等教育のアクティブラーニング化⁴⁹の議論に非常に似ている。また、小中高にそれを広げる動き⁵⁰も出てきており、教育現場とランガナタンの主張が近づきつつあるように感じられる。では成人教育においてはどうかであろうか。本書の主張に従えば、成人教育も似たような手法で学びを行うべきである、と考える。

この主張を基に現代の日本の状況を見れば、次の問題点が浮き彫りとなる。つまり図書資料と学習スペースの分断である。

たしかに成人教育においては、図書館と公民館・市民センターの整備が重要であり、問題がある自治体はあるものの、一定数施設は設置されていると言えよう。しかし、現状では、本を提供するのは図書館、グループ活動やグループ学習を行うのは市民センターと明確に施設が分かれている。ランガナタンの主張は、本の城塞である図書館ネットワークが成人教育を支え、その本を活用して自己教育を行う、それはグループで学び合い教え合う、というものである。これら施設は一施設にまとまっていることが望ましい。公共図書館は従来通り静かに図書を読む場所、個人的に調査研究を深める場所、

⁴⁸ 拙著「S.R.ランガナタン"New Education and School Library"に見られる教育の概念と学校図書館観」『教育思想』42号, 2015, p.45.

⁴⁹ 文部科学省「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）【概要】」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338888_1.pdf, (参照:2015-11-23) .

⁵⁰ 文部科学省「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm, (参照:2015-11-23)

或いは本を借り出すところ、という認識で運営され、公民館・市民センターは、市民のグループ活動を施設の提供で支援すること、そして講座を開き、学びを促進すること、と役割が住み分けられている。

ランガナタンが考える教育のあり方から鑑みると、この分断は解消を目指すべきものとなる。そして一層の連携を進め、統合されねばならないと考える。つまり資料からグループで学ぶ場まで一か所に集まるラーニングコモンズ的な施設が、自治体の図書館や市民センターにも置かれる必要があるのである。実現すれば、その施設はその地域の教育の中心となり、より重要な役割と地位を入手すると考える。

8.3. 図書館情報学的意義

本書で示されるランガナタンの思想は、人間形成の本質に立ち戻って図書館を検討することから、図書館情報学的には独特なものとする。通常、図書館情報学は、西洋的な学問体系の上に成り立つ社会科学（情報学は工学）の一種である。一方ランガナタンの思想は、インド古典やヒンドゥー思想に示される人間形成観に根ざしたものである。それらを背景にしているランガナタンの図書館思想も独特なものである。

この図書館観は、欧米で発展してきた図書館情報学とは別のアプローチを導く可能性を持っているのではないであろうか。特に昨近における教育のアクティブラーニング化の文脈で、図書館の教育的見地による再解釈が行われる中、有益な視点を示すと考える。特にランガナタンの主張するヴェーダやウパニシャッドの教育観は、現代のグループ学習といったアクティブラーニングのスタイルと近似性があり、今後さらなる研究の余地があると考えられる。

9. 終わりに

本稿は、ランガナタンの『余暇のための教育 (Education for Leisure)』の解釈と紹介、とくにランガナタン自身の教育思想の抽出と検討を課題としたため、本書が話題としている成人教育論を他の成人教育思想や歴史的背景と比較検証するまで手を伸ばすことができなかった。次回以降の課題としたい。

本稿を作成するに当たり、次の方々にお世話になりました。御礼申し上げます。

秋田大学 加藤信哉様、同 小池孝範様、図書館情報大学名誉教授・元日本図書館協会理事長 竹内愨様